
死処

詩音

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死処

【Nコード】

N7170B

【作者名】

詩音

【あらすじ】

死にたいと考える少女、殺人に憧れを持つ少年、そして自分に正直な殺人犯。この三人は偶然出会ってしまった。

0 話：プロローグ（前書き）

タイトルにもありますがプロローグです。少々暗い話ですが読んでみてください。

0 話：プロローグ

桜が散り、新緑の季節が始まる頃。

事件は年に一〜二回というくらい静かで平和な町で、前代未聞の出来事が起こった。

連続殺人事件。

場所は町に数少ない小さなコンビニ。それなりに賑わいを見せるそこで、事件は起きた。

事件の知らせを受けた警察は久々の仕事だと気を引き締めた。彼等を待っていたのは真っ赤な血に濡れた床や壁に飛び散った血痕、それにすでに事切れた五体の人間達。久々の事件は大きすぎた。ニュースでも大々的に世間に知らされ、県から警察の偉い人間を呼んだりした。

「調べてわかっていることは？」

県からやってきた刑事が町の警官に尋ねる。

「防犯カメラに映った犯人は一人だけでした。長身で金髪、顔はよ

くわかりません。そ、それと……」

言いづらそうに言葉を濁す警官。刑事に怒鳴られ、一気にしゃべった。

「本来、コンビニには七人の人間がいたはずなんです。客と店の人間を合わせて。」

二人分の死体は見つかっておらず、途中で防犯カメラは壊され犯人もその二人も行方知れずに。

警察は誘拐されたと判断をし、捜査を始めた。

消えた二人は、殺人犯に殺されたのだろうか。それとも……

1話：詩乃（前書き）

一応主人公である、死にたい少女の始まり部分です。

1話：詩乃

毎日が、ただつまらなかつただけだ。

「詩乃、何処行くの？」

「屋上の階段。」

「ふーん、行つてらっしゃい。」

友人は一応いる。でも深い付き合いはしない。ベタベタするのが嫌いだし、正直友情とか面倒くさい。今時の女子高生が言う台詞ではないが。

私の数少ない友人もかなり適当な人間で、あちこちの女子と話をして飽きたら他へ移動する器用な（飽きっぽい）人間。だから、こんな軽い関係が楽で良かった。

私、岡本詩乃オカモトシノが通う深台高校はいたって普通の学校。どちらかというと馬鹿の集まりだ。

つまり私も馬鹿の一人ということになるが、私の所属している二年生の中では十位くらいに入る頭は持っている。まあ、登下校に便利な場所が此処だから入学したという安易な話だ。

「あー…面倒くさい。」

これが私の口癖。学校では一日に五回以上言つてると言われた。

屋上に続く階段を昇りきり、ブレザーのポケットに手を入れる。

携帯電話や友人からもらった飴玉、そんなものの中に紛れてひんやりした金属物…鍵をつかむ。

カチッ……

屋上の鍵が開いた。戸惑うことなく私は扉を開く。

本来なら屋上は開放禁止とされているのだが、私は卒業した先輩からこの鍵をもらっていた。

「ちゃんとして上手く使いなさい？」

そう言った先輩はこの前飛び降り自殺をした。学校の屋上より遥かに高いビルで。

先輩はこんな場所で一人何を考えていたのだろうか。そんなことを頭に浮かべ、今日も屋上のだ真ん中に寝転ぶ。しばらく横になっていると風の変化を感じた。

私は立ち上がってフェンスに近付く。

「……。」

高いところは風が強い。肩に軽くつく茶髪が大きく揺れた。このくらいの高さじゃ死ねないか…。

心の中でため息をつく自分に少し笑ってしまった。

私も自殺した先輩と同じように死にたいのかもしれない。

ただ、なんとなく自殺は嫌だった。だから事故や事件でもあれば……なんて思うものの、この町で大事件なんか聞いたことない。何気無く携帯電話を見れば下校時刻になっていた。

「バイト行かなきゃ……。」

フェンスから離れて階下に降り、バイト先のコンビニへ向かった。
「面倒くさい……。」

いつものように口癖を呟きながら。

2話：司馬（前書き）

殺人に憧れを持つ少年の始まりです。ほんの少しですが読んでいて不快な部分があるかもしれませんが、ご了承ください。

2話：司馬

この感情を、何と呼べば良いんだろう。

「だからこのXを…」

カリカリとペンの走る音と数学教師のデカイ声が響く。

俺、須賀^{スガシバ}司馬は黒板にびっしり埋まった数学の公式に飽きて、外を眺めていた。

「須賀！！」

「あ、はい。」

教室に目を戻せば、クラスメイトの視線と眉間にシワを寄せる教師の姿があった。

「ボーツとしてるとわからなくなるぞ。」

「…すみません。」

勉強なんか正直どうでもいいんだが。この学校はそれを許さない。俺の通う木坂高校は進学校として県内でも有名だ。ど田舎であるにも関わらず、わざわざ県外から来る人間も多い。

「はあ……。」

そんなに勉強して何を得たいのか。

俺は顎に手を乗せ、眠る体制をとった。

逃げ惑う女。後ろを振り返るその顔は涙と汗でぐちゃぐちゃになっていた。

それを荒い息遣いで追い掛けるのは…俺だ。手にはサバイバルナイフを持ち、手ぶらの方は女に向かって伸ばされている。

「やめて…お願い助けて…!!」

泣き叫んでいる女に俺は笑顔でナイフを向けた。

「おい須賀!!」

「——っ!?!」

思いきり肩をつかまれて目を覚ます。

そこにはクラスメイトの友人がいた。名前は覚えてない。最近知り合ったばかりだから。

「授業中寝るなんて余裕だなお前。」

苦笑いしつつそいつは言った。

彼は人懐っこくて、クラスで人気者だ。

その性格からか、比較のおとなしい部類の俺にもたまに話しかけてくる。

「今回の試験あきらめたわ。」

「嘘言え、前もそんなこと言って俺より成績良かったじゃねえか。」

こういうところは意外と記憶力良いのに、勉強に使えないのもつたいたいといつも思う。

「はあ…。」

クラスメイトが離れた後、俺は深くため息を吐いた。

もう少し寝てたら最期まで殺せたのに…。

こんな俺を誰かに話せば確実に引かれる。でも殺したい衝動を止める気が俺にはなくて、夢のことなのに興奮がなかなか止まらない。再び眠る気にもなれず、仕方なく俺はくだらない勉強に励んだ。

「ふあ…。」

大きな欠伸をしながら帰り道を歩く。

俺には小さいときから人を殺すことに憧れがあつた。テレビドラマにそういうシーンがあると、瞬きもせず視線を集中させていたものだ。

両親はそんな俺の変化に気付くことはなく、今の俺の姿があるのはそのお陰だろう。仲の良い普通の息子として育てられたからだ。

「…夕飯…。」

今日は両親ともに不在で、夕飯がないことに気付いた俺は近くにあつた馴染みのコンビニに入った。

3話：アサミ（前書き）

自分に正直な殺人犯の始まりです。

3話：アサミ

初めて人を殺したのはいつだったけかな……。

「おつ、今日乙女座一位じゃん。」

トーストとコーヒーで朝飯を簡単に済ます。

男の癖に乙女座ってあたりが気分的には嫌な俺、アサミ。

「なんか良いことあるかも。」

俺は立ち上がって透明なケースを見つめる。中にはいくつものナイフや拳銃が並んでいた。勿論モデルガンなんかじゃない。

「今日はどれ使うかな……。」

本物の武器なのだから、持つてるだけでも警察沙汰だろう。俺はまだ一度も警察の世話になったことはないが。

「やっぱこれか。」

取り上げたのは一番手に馴染んでいる小型の拳銃。名前は……忘れた。とりあえず人を殺せれば良かったから。

「今日は運勢も良いっぽいし……。」

例の計画でもやってみるか。

俺は黒いコートを羽織り、愛用の煙草をくわえて外へ出た。

電車で揺られること約四時間。乗換えは三回。その暇な時間、俺はなんとなく昔を思い出していた。

子供の頃の記憶で一番鮮明に残っているのは目の前で殺人事件を見たことだ。

殺されたのは俺の姉で、殺したのは俺の父だった。何故姉は殺され、父は殺す必要があったのか――今でもよくわからない。

警察に連れて行かれる父の背中を見たそのときから、俺は頭のネジが緩んだらしい。人が傷つくことや死ぬことに対して悲しむ気持ちが薄れるようになっていた。

今では自分が父を追い越して殺人を犯している。

この前も一人殺した。あの悦びと興奮の瞬間を分かち合えるのは、俺と同じ快樂殺人者くらいだろう。そんなことを思っている間に目的地に着いた。

「……ど田舎。」

俺は水田や林ばかりの田舎町に降り立っていた。駅自体も廃れていて、人の出入りもまばらだ。

俺は車を借りてエンジンをかける。

「さて、始めますか。」

無名に等しい田舎が有名になる大事件を。

これから起こることを想像し、俺は一人笑みを浮かべた。

4 話：事件

「いらつしゃいませー。」

疲れたなあ……。

レジに立つて三十分。客はたまに来るが忙しくもなく、結構暇な状態。私は棒読みでレジ用語を言いながら外をボーッと眺めていた。

「詩乃ちゃん、商品並べてくれる？ 此处やつとくから。」

「はい……。」

店長の指示におとなしく従う。所詮バイトだし。

彼はかなりの女好きで、今までバイトは若い女の子しか雇ったことがないらしい。趣味は競馬。今は金欠に悩んでいるという最悪に素晴らしい人間だ。

「はあ……。」

店内にはガラの悪い男が三人と暇そうなサラリーマンが一人。むさつくるしいこの状況に自然とため息が出る。私はお弁当を並べるのに集中することにした。

「あ、いらつしゃいませー。」

店長の声に顔を上げる。そこには木坂高校——県でも有名な進学校の制服を着た男の子がいた。

「……。」

愛想笑いの店長を一度も見ることなく、男の子はこちらのお弁当

の棚にやってきた。

「いらつしゃいませ。」

一応言ってみた。彼はそれなりの頻度でよく来る常連さんだからだ。

「……。」

勿論返答はない。真面目な顔付きで棚に並んでいるお弁当を選ぶその姿はなかなか面白い。

それにしても……今日は客が多い。私は気分が下り坂になるのを感じた。

「いらつしゃいま……」

店長はそう言いかけて止まった。

私が入り口を見ると、真っ黒なコートと金髪が印象的な長身の男がいた。

「……コンニチハ。」

ニツと笑った男は素早く黒い鉄の塊——拳銃を取り出した。

ドンッ……！！

耳をつんざくような銃声。

「うわぁぁっ！！」

「ひいっ!?!」

舞い上がる灰色の煙。客は驚きと恐怖の入り混じった叫び声を上げた。

「……………」

「……………」

私とお弁当の男の子は状況についていけず、ポカンとしていた。

「何ビビってんの。まだ誰も撃ってねえけど？」

発砲した当人は平然と言った。天井を指差しながら。

その場所をよく見れば小さな穴が開いている。さっきの発砲は脅しみたいなものだったようだ。

「も、目的は…………？」

「決まってるじゃん、金。」

銃口を店長に向ける男。前髪が少し長いせいで顔がよく見えないが、笑っているように感じた。

「あるだけ全部欲しいんだけど。」

「い、今すぐ……………!!」

慌ててレジの操作をする店長。そのとき――

「あああつ!!」

不良三人のうちの一人が叫びながら金髪男に飛びかかろうとした。

「うつせえな。」

そう言った瞬間、金髪男の目が変わった。

ドンッ!!

「うぐ……っ!!」

真っ直ぐ心臓部分を撃ち抜かれ、膝から崩れ落ちる不良。

勢いよく血が吹き出して、コンビニの床を濡らす。金髪男の顔にも返り血がついた。それが彼の肌の白さを際立たせていた。

「深山!!」

「しっかりしろ……!!」

仲間が駆け寄って声をかけるが本人である深山はピクリとも動かない。

「あーあ、死んじやったね。あつけない。」

つまらなさそうに金髪男は言った。

「……んだと?」

不良二人のこめかみがピクツと動いた。怒りを露にしている証だ。そんなことを考えてる私は死んだ男をじっと見つめていた。

心臓がどんどん高鳴っていく。恐怖ではない。私も殺されたいという、羨望の気持ちだ。

レジの方を見れば、店長が腰を抜かしている。サラリーマンも見つからないように隅に隠れて震えていた。

使えない奴ばっかりだ。横にいる男の子を見れば、じつと金髪男に視線を向けている。

「おい、人をそんな目で見んなよ。……殺したくなる。」

笑みを浮かべた金髪男に震えたのは私だけだろうか。

ドンー！ドンッー！

「がは……っ！！」

「……ッ。」

不良二人も撃たれた。迷わず心臓のと真ん中に。

「ひいいいっ！……！」

「……ううっ。」

目を背ける店長とサラリーマン。そんな中でも私と男の子は達観に近い状態でそれを見つめていた。

「あとは……」

キョロキョロと顔を動かして金髪男はサラリーマンのいる隅に移動した。

元いた場所は血の海になっており、金髪男の足跡を紅くしていた。

「や、やめてくれ……金なら払うから……！！！」

サラリーマンは汗だくで震えながらも鞆から財布を出す。

「くれんの？ありがとう。」

それをおとなしく受け取る金髪男。

「じゃ……ばいばい。」

「え……」

ドンッー！

「何、で……。」

それがサラリーマンの最期の言葉だった。

目の前でこれだけの人が死ねば、流石の私も吐気がする。

「……………」

しゃがみこんで気分を落ち着かせる。それでも死にたい気持ちは消えなかった。

「く、来るな……………近付くな!!」

店長の叫びに顔を上げる。ハサミを振り回して威嚇している。

冷や汗がダラダラ流れ、顔はぐちゃぐちゃだ。

「近付くなって……………じゃあこれなら良い?」

金髪男はレジとは反対側の方に歩き出した。距離は二十メートル以上。

呆然とする店長に対して金髪男は銃を構えた。

「待つ……………」

ドンッ!!

「っ!!」

店長は背中を壁につけてずるずると崩れていった。

「……………」

「……………」

数秒の静寂。

「お前ら、俺と一緒に来る?」

銃をコートにしまい、金髪男は言った。

「え……。」

「……。」

私の人生の、何かが変わろうとしていた。

4話：事件（後書き）

久々の更新です。

なかなか書く暇がなくて進みは遅いですが完結を目指して頑張ります！！

5 話：逃亡

「何で私達のこと殺さないんですか？」

「弾切れー。」

黒いワゴン車に揺られる私と男の子。運転席には金髪男が、後部座席には私と男の子が並んで座っていた。

質問にひょうひょうとして答える金髪男は慣れた手付きで何処かへ向かう。

「……何処行くんスか？」

沈黙を徹していた男の子が言う。

「俺の秘密基地。っていうか自己紹介しねえ？まずバイトから。私のことだろう。バイトなんて言われ方は癪だが仕方ない。」

「……詩乃。十七歳の高二。」

「詩乃ね、じゃあその隣は？」

バックミラーからこちらを見ている金髪男。

「司馬。歳も学年もこの人と同じ。」

「名乗ったんだからちゃんと名前で呼べば？」

思わず私はそう口走っていた。司馬とはコンビニで何度か会ってるから初対面ってわけでもないし、この人呼ばわりされたくないから。

「……詩乃と同じ。そっちは？」

少し間を開けつつも言い直してくれた。

「アサミ。歳はお前らの三つ上。」

つまり二十歳だ。

「アサミ……って名字ですか？」

「さあ？想像に任せる。」

金髪男改めアサミさんは適当にそう答えた。

一時間後……

「此処で降りて。」

アサミさんに言われるまま私と司馬は車を降りた。そこはかなり込み入った山の中で草むらに囲まれており、道らしいものはなかった。

「詩乃、置いてくよ？」

「あ、はい。」

先頭を歩くのは勿論アサミさん。その次に司馬、最後が私。男二人の後なので草むらを通るのは楽だった。

不思議な話だ。普段ならバイトから家に帰って寝ている時間なのに、名前と年齢しか知らない人間とともに行動しているなんて。

「此処が秘密基地。」

「……廃墟？」

「確かに。」

私の感想に納得をする司馬。

「まあ、中入ってよ。」

アサミさんに促され、廃墟に入る。

壁はほころびがあつたが、床には暖かそうな絨毯が敷いてあり家具等も一通り揃っていた。

「へえー、結構まともだ。」

「だろ？」

気に入った様子の司馬にアサミさんはなんだか嬉しそうだ。

「此処で殺す気ですか。」

「ふーん、やっぱな。」

私の問いに意味深な笑みを浮かべるアサミさん。

「お前死にたいんだろ。」

当たりだ。私は驚いて目を見開きながらもアサミさんから目を反らす。

「自殺すりゃあ良いのに。」

「……っ。」

私は否定出来なくてすがるような瞳でアサミさんを見てしまう。アサミさんは私から司馬へ視線を移した。

「司馬は人を殺したいって思ってる。違うか？」

「え……」

意外な言葉に私も視線を向ける。

「思ってるよ。」

そう答えた司馬の表情は『無』そのものだった。

「目が気に入ったんだ。お前らの。」

満足そうに笑みを見せるアサミさん。

「……目？」

聞き返すとアサミさんは真っ直ぐ私を指差してきた。彼が急に真剣な顔付きになって、私は少し眉をひそめる。

「死ぬことに憧れを持つ目。」

「……。」

今度は司馬を指差す。

「誰かを殺すことに憧れを持つ目。」

「……。」

「なんて、言ってみたり。」

表情を緩め、アサミさんが奥の部屋に移動する。

「詩乃、良いモノ見せてやるよ。あー、ついでに司馬も。」

「……俺オマケ？」

その突っ込みに私は少し笑ってしまった。

「この部屋。」

案内されたのは廃墟でも一番奥の部屋。周りには他の部屋が無く、隔離されているようだった。

「此処に何かがあるんスか？」

「えーっと……、まあ俺の趣味ってとこ。」

「趣味……。」

目が前髪で見えないアサミさんの考えていることはまったくわからない。

「ただ、このドア開けたらもう普通の生活出来ないと思えよ？」

「……。」

背筋が凍った気がした。それだけのものを何で私達に見せようとしてるんだろう。

「反応が見たいんだ。これを見てどう思うか。」

一瞬、心の中を読まれたかと思った。

「開けて良い？」

司馬が尋ねてくる。

「うん。」

もう普通の生活なんて望んでないから。

私ははつきり頷いた。

そして、ドアが開く。

「寒……。」

「何、此处。」

その部屋の通路はドアの分しかなかった。両脇には透明なカーテンがついており、白い煙がたちこめている。中の気温は零下何度だろう。吐く息は白い。

「こつち。」

アサミさんが私と司馬をカーテンの中に招く。

「寒いー。」

「何で此处だけこんな寒いんですか……。」

「こつしないと保存出来ねえんだよ。」

「保存？」

そう言っつて私の体は固まった。

目の前に肘から先の腕があつた。指はピンと上に伸びている。数は五十くらい。それが床に立っているのはなかなか不気味だった。

「これが俺の趣味。」

愛しそつに切り放された腕を見つめる。

「……。」

体が震え出す。呼吸も浅くなった。

「アサミさん。これ、本物ツスか？」

司馬がゆっくり手を伸ばす。

「触るなよ？壊れっから。」

「作り物ですか……」

私はそう呟いた。内心は安心と残念な気持ちが入り混じって複雑だった。

「いや、細胞が死んでると思うから触るとどうなるかわかんねえんだよ。」

並んでいる腕まであと数センチのところまで司馬が止まった。

「全部、アサミさんがやったってことになりますよ？」

「だってそうだし。」

当たり前のように鼻で笑った。その表情を綺麗だ、なんて思った私はおかしいかもしれない。

「寒くなってきたな、出るか。」

私と司馬は黙ったまま頷いた。

「ん。」

アサミさんがコーヒーを差し出す。

「あ、ども。」

「ありがとうございます……。」

控え目に礼を言いつつ、私達はコーヒーを口に運んだ。

「どうだった？俺の趣味の部屋。」

「……びっくりした。」

司馬が率直な感想を述べる。

「私もそう思った。それに、凄く綺麗だった。」

まるで花畑のような真つ白な世界。憧れてしまった、あんな風に綺麗に死にたいと。

「確かに。芸術的だったな……。」

こののんびりした状況でも先程の記憶が鮮明に浮かびあがる。

「そっか。」

あまりにも幸せそうにアサミさんが笑うから、私の胸は少し高鳴ってしまった。

「詩乃、しばらく此处で生きてよ。」

「……は？」

「司馬も、色々教えてやるから。」

「此处まで連れてきて聞くな普通……。」

呆れ顔の司馬だがまんざらでもないようだ。

「これから三人で共同生活ね。」

有り得ない。死ぬはずがまだ生きることになってしまった。

「……わかりました。」

でも此处なら確実に死ぬる。

そう考えた私はこの奇妙な共同生活を受け入れることにした。このアサミという男にも興味を持ってしまったから。

6話：共同生活

「……あ。」

アサミさんの共同生活開始宣言の後。

「ねえ、司馬。」

「何。」

私と司馬はリビングにいる。

絨毯の上に座る私。司馬は灰色の二人分座れるソファを占領して横になっていた。顔の上には推理物の文庫本が乗っている。

「ほら、コンビニがテレビに映ってる。」

リモコンでテレビを指差す。

画面には真面目な顔付きで局のリポーターがしゃべっている。テレビカメラなほ他のリポーターも映っており、他局もニュースにしていることが伺えた。

「……まあ、あれだけやればこれくらい騒がれて当然じゃない？」

「確かにね。」

似たもの同士だと知り、初めて話してから数時間で私と司馬の親睦はそれなりに深まっていた。

「詩乃は何で死にたいの？」

唐突な司馬の言葉。

「……なんとなく。司馬は？何で誰かを殺したいの？」

「俺もなんとなく、かな。子供のときから結構憧れてたし。」

「ふーん……。」

私は立ち上がった。

「何、どうかした？」

「あの部屋行ってくる。」

あの部屋とはアサミさんの趣味の部屋。
また見たいという欲望が出てきたのだ。

「これ。」

「何？」

毛布を投げられた。意図がわからずに司馬を見つめる。

「あの部屋寒いだろ。」

「……ありがと。」

リビングを出て部屋までゆっくり歩く。

おかしい話だが、こんなに同じ人と過ごすのは久しぶりだった。
ちよつとした優しさがくすぐったい。

「はあーっ……」

アサミさんの趣味の部屋に入った。吐く息が真っ白だ。毛布にくるまって足を進める。

彫刻のような腕達は何度見ても新鮮な気持ちにさせられた。

「また来たの？」

「——っ!!」

いきなり話しかけられて、私は心臓が止まるくらい驚いた。

「アサミさん……」

「何だよ、幽霊見たような顔して。」

アサミさんは鼻を少し赤くして笑った。

「このクソ寒い中よく来るな。」

ハマったの？とアサミさんが聞いてくる。

「……いつからいたんですか？」

彼の顔は真つ白だった。周りに並んでいる腕と同じくらい。

「五分くらい前。」

「その格好で？」

毛布にくるまる私とは違い、アサミさんは白い長袖のシャツという薄着姿。

「うん。」

「風邪ひきますよ？」

私は毛布を渡そうとしたが断られた。

「慣れてるから平気だよ。」

何処が平気なんだろう。アサミさんが凍死しそうくらい儚げに見える。私の目は末期症状なのだろうか。

「……そろそろ出ませんか？」

このまま放っておいたら確実に彼は死ぬ。

「俺はまだいい。」

「じゃあ毛布くらい被ってください。」

無理矢理毛布を頭に乗せて部屋から出た。

「……変な人。」

コンビ二でのあの狂気じみた目はもう見れないかもしれない。

他人の殺生を気にしないアサミさんは自分の生死も気にすることはないようだった。殺す以外は無関心、といったところか。

「もう帰ってきたの？」

意外そうな顔の司馬に出迎えられた。

「うん、まあ……」

返答に困って言葉を濁す。

「司馬。」

「ん？」

「私は此处で死ねるかな。」

これからに不安を覚えてしまった。

「……さあ。」

司馬はそれしか言わなかった。

「ただいま。」

「おかえり。」

「……おかえりなさい。」

アサミさんは毛布をかぶって登場した。心なしか顔が青白い。

「司馬、ちょっと来て。」

「何スか？」

「良いとこ連れてってやるよ。」

ニツと笑みを見せるアサミさん。司馬は眉間にシワを寄せつつ、アサミさんについていった。

「……。」

残された私は、しばらくテレビを見つめていたが睡魔に負けて眠ってしまった。

「おい、詩乃。起きろって。」

頬に指が当たる感触がした。プニプニ押されて目を覚まさない人間は少ないと思う。

「んー、何……？」

眠い目を開かせばんやり見える人影に尋ねる。

「大分寝惚けてんなあ。低血圧？」

アサミさんが笑っている。睡眠の邪魔をする犯人はこの人だった。

「あのさー、今からちよつと騒がしくなるけど気にすんな？」

「うん……。」

眠気は消えず、アサミさんの言葉は半分しか聞いてなかった。

ドンッ！！

「……！！？」

一瞬で目が覚めて、音の方に走る。それは腕の部屋とは真逆の方向だった。

「何事ですか！？？」

「あれ……詩乃？」

そこにいたのは人型の的と、拳銃を構える司馬とアサミさんだった。

「……え？」

状況の把握がまったく出来ない。

「気にするなって言ったのになあ。」

「あー……」

そつえばそんなこと言ってた気がする……私は両手で頭を抱え

た。

「詩乃？大丈夫か？」

「……二人で何してたんですか？」

「司馬の願いを叶えてるところ。殺したいなら方法を身に付けなきゃいけないだろ？」

「……成程。」

だから私は呼ばなかったわけか。

「アサミさん。これちゃんと当たらないんすけど。」

銃の調子が悪いッス、と眉間にシワを寄せて司馬が呟く。

「馬鹿、お前にセンスがねえだけだよ。」

交互に的へ撃っている司馬とアサミさんの背中を私は座って見ていた。

やっぱりアサミさんは撃ち慣れている。当てるのは必ず心臓付近だ。一発で殺すことにプライドがあるのだろうか。

それにしても……

「……腹減った。夕飯にしねえ？」

この人なら何処までもマイペースを貫けると私は思った。

7話：夕食

「何食いたい？」

「……。」

「全部カップ麺じゃないツスカ。」

キッチンのテーブルにはインスタント食品の山。

はつきり言つて……

「不健康。」

「うわー、詩乃ってばはつきり言つのな。」

アサミさんは傷付いた表情で言う。勿論おふざけだ。

「……。」

「……。」

冷めた目でそれを見る私と司馬。

「うちにはこれしか無いの。ほら、とつとと選べ。」

恥ずかしくなったのか、アサミさんは突き放すような台詞を吐いた。

私はそば、司馬はうどん、そしてアサミさんはラーメンを選んだ。

「此処つて買い物とかどうするんですか？」

「山を降りればスーパーあるから何とでもなる。」

「アサミさん、何か飲み物無いんスか？」

「水飲め。」

「えー……。」

司馬は口を尖らせ不満を露にしキッチンの流しに向かったが、すぐに三つのコップに水を入れて戻ってきた。

「久しぶりです。」

「何が？」

司馬が首を傾げる。

「こんな風に食事するの。私一人暮らしたから。」

料理に対しては何も言うことはない。疲れたときや面倒くさいときはインスタントに頼る。

「そういえば俺も久しぶり。」

「俺も久々だわ。」

司馬とアサミさんが頷いてくれた。

結局のところ、私達三人は似てるらしい。毎日が孤独だった。

「つていうかアサミさんコンビとキャラ違いすぎじゃないッスか？」
私が思ってたことを平然と述べる司馬。ある意味大物な気がする。

「スイッチがあんの。オンとオフで。」

「オンが殺人？」

「そう。」

答えてからアサミさんはラーメンをすすった。

「スイッチってどうやって切り替えるんスか？」

「結構いきなりかも。衝動にかられたら山を下りて手近な獲物を狩る。」

獲物とは勿論人間のこと。

「……あの。」

「ん？」

「殺した人の腕をあ部屋に飾ったら、残りの死体ってどうなるんですか。」

どうしようもなく気になっていた。私もあんな風になるだろうか。

「焼いたり穴掘って埋めたり……色々。」

アサミさんは五十近くの死体を片付けた。それは殺した本人だから当然のことだが私は少し驚く。

「何？詩乃は希望あるの？」

じつと私を見つめるアサミさん。

「……別に、無い。」

「そう？」

できたら言えな。そう言っアサミさんは最後のスープを飲み干した。

「ごちそうさま。さて、と……俺ちよつと出掛けるから。」

アサミさんは立ち上がってシャツの上にジャケットをはおった。

「良い子にしてろよ？」

「良い子にしてろよって子供じゃないんだから……」

司馬がむくれる。アサミさんが去った後なので聞いているのは私人だ。

私は今暇潰しに棚に並んでいた本を読んでいる。題名は『樹海』。自殺する人間達の生きざまを綴ったフィクション（作り話）だ。

「それ、面白い？」

司馬も暇なのだろう。私を見てそう尋ねた。

「普通。」

夢中になって読むほど面白いものではない。だって所詮作り物だし。

「……詩乃って好きなものとか無いの？」

「司馬はあるの？」

本を閉じた。視線は真っ直ぐ司馬に向かう。

「あるよ。」

あっけらかんと答えたものだ。

「……何。」

「サスペンス系のドラマ。殺すシーンとか特に。」

「彼らしい。そう思うしかなかった。」

「で？好きなものは？」

「無いよ。好きなものなんて。」

「思えば何かに強く惹かれたことが生まれてから一度もない。」

「それは……つまらないね。」

「そうかな。」

殺人シーンを好む人間よりは幾分かマシだと思う。そう言いかけ
てポケットに振動がきた。

「あ……。」

携帯電話……存在をすっかり忘れていた。

画面に出る名前はクラスメイトの友達。一番仲が良かった子だ。

「電話……そういえば俺も持ってたかも。」

司馬は私達の荷物が置いてある隅の方に歩き出した。

「もしもし……？」

電話に耳を当てる。

「詩乃？詩乃だよな？」

興奮を隠しきれてない声で何度も名前を呼ばれた。

「どうしたの。」

「どうしたじゃないよ！！今何やってんの？事件あったコンビニっ
て詩乃がバイトしてたところでしょ？何かあったんじゃないかって心
配して……」

電話に出なきゃよかった。心配してくれる数少ない友人に対して
も、私の感情は冷めていた。

「私まだちゃんと生きてるから。じゃあね。」

「ちよ、ちよっと待ってよ！！」

「何？」

面倒くさいなあ……。

「まだ生きてるって、アンタ死ぬ気？」

「……。」

「やっぱそうなんだ……前から詩乃って生きることに興味なさそうだなって思ってたの。」

「絶対ダメだよ！！生きてたらきつと良いことあるよー！！」

黙っていたのを肯定ととったらしい。そこらへんは頭が回るんだ、なんて失礼なことを言ってみる。

「綺麗事やっていけるほど世の中甘くないから。」

そう言ってこっちから電話を切って電源を消す。画面が真っ黒になったのを見届けてから、私はソファに倒れ込んだ。

「良いの？友達いなくなるよ？」

もう一つのソファに座った司馬が言う。

「……もうすぐ死ぬからいい。」

「ふーん。アンタって固執してるよね。死ぬことに対して。」

「悪い？」

「別に。ただせつかく産まれてきたのにもったいない気がするだけ。」

『産まれてきた』その言葉に目眩を覚えた。

過去に置いてきた嫌な記憶が蘇ってくる。

「……っ。」

「詩乃？」

私は膝を抱えて小さく丸まった。

「どうした？」

「……何も、ない。」

不安げにこちらにやってきた司馬。その顔を見ずに私は答えた。
久々に私の中の感情がドロドロになっていく。こういうときはお
となしくしてるに限る、それが私の人生で得た教訓だった。

三十分くらい経ったろうか。その間私は丸くなって時が過ぎるの
を待った。

「……。」

司馬は態度が急変した私が気になるようでチラチラこちらを見て
くる。でも私は何も言わなかった。

「ただいまー。」

入り口の方からアサミさんの声、帰ってきたらしい。

「あ、おかえり。」

慌てた様子で司馬はリビングを出ていった。私は動くのも億劫で、
ソファから動かなかった。

「詩乃ー。」

面倒だったので体を身じろがせて反応した。

「何、具合悪いの？」

「……死ぬほど頭痛いです。」

「風邪か？」

側頭部にアサミさんの手が乗った。それを払い除けて私はアサミ
さんを睨みつける。

「早く殺してください。」

こんな状態で生きるなんて御免だ。

アサミさんはきょとんとしてからフツと笑みを見せた。

「情緒不安定、ってヤツか？」

「……。」

変わらずにアサミさんを見つめる私。ソファから少し離れたところで司馬が私とアサミさんの掛け合いを見ていた。

「早く殺して……」

いつの間にか私は涙声になっていた。

「存在を疎まれた私は、生きる必要がないんですよ……」

私の言葉にアサミさんが顔をしかめた刹那、体が宙に浮いた。

「……え？」

「ジッとしてろよ？」

今の状態は俗にいうお姫様だっこ。

「ちよっ……」

恥ずかしいものの、体に力が入らない。丁寧に抱えられ、私のものになった部屋のベッドに寝かされた。

「しばらく寝てろ。」

「……。」

アサミさんの声を耳に入れながら、ぼんやりとコンクリートの天井を見上げる。

「俺はまだお前を殺す気はない。時期が来たら、ちゃんと殺してやるよ。」

ぼんっ、と頭を叩かれた。

「……初めて」

「あ？」

「アサミさんが初めてなんです。私の頭撫でたの。」

「……あっそ。」

どうでもよさそうな返事でも、頭を撫でる手は止まらなくて、私は深い眠りについた。

8話：詩乃の過去。

「アンタなんかいなきやよかったのに。」

母親に言われた言葉だ。そのときの私には意味がわからなくて、ただ母親を見つめるだけだった。血の繋がってない母を。

私を産んだ本当の母親は私を産んで死んでしまった。難産だったらしい。赤ん坊になったばかりの私には何の記憶もないのだ。

「詩乃、お母さんは今遠くにいるんだ。でも必ず帰ってくるから、良い子で待ってような？」

「うん……」

五歳の頃、父親が言った。母親の死を誰からも伝えられてなくて待つてればいつか母親が来ると信じていた私。今思えば浅はかで愚かだ。でも信じるしかなかった、父親が見せる世界が私のすべてだったから。

それから半年が過ぎた頃、父は知らない女を隣に家に帰ってきた。

「この人がお母さんだよ。」

「お母さん……？」

私の目の先には薄く笑みを浮かべる女。

「これから一緒に住めるの、よろしくね？」

「……うん。」

このとき、この母親の冷淡な笑顔の裏に気付いていたら、今の私にはならなかっただろう。

「お父さん……。」

それから三年が経った暑い夏の日、父が死んだ。

私は八歳で、『死』ということがようやくわかってきたところだった。それでも信じられなくて、涙が流れることはない。

「詩乃……お父さんが死んだのに、悲しくないの？」

「お母さん？」

パンツ！！

乾いた音が静寂を破った。母に叩かれた左頬が熱を持つ。

「アンタ、自分の父親が死んだのよ？」

はらはらと涙を流す母。私はそれを見て泣き出してしまった。

「あ……ごめんなさい。」

はっ、と我にかえったような表情で母が謝った。泣きじゃくる私を抱き締め、何度も謝っていた。

それから、今まで家事をしていた母は外に出て働くようになった。

私は友達と遊ぶ時間を減らし、家事をやるようになった。

変化した生活が落ち着いてきた、そう思っていたのは私だけだったらしい。

平穏だった日は終わりを告げた。

「ただいまー。」

いつものように家に帰ったある日、見知らぬ革靴が玄関にあった。しかも普段ならまだ帰っていない母の靴もあったのだ。

「お母さん？帰ってるの？」

靴を脱ぎ捨て、足を踏み入れる。

「お母さ……」

居間まで入って足が止まってしまった。みしらぬ男が前の父親の席に悠然と座っていたのだから。

「おかえり。」

「……どなたですか？」

あたりまえのように出迎え、男はお茶をすすっている。

「あら、おかえりなさい。」

「お母さん、この人誰？」

普段私が着けているエプロン姿で母は出迎えた。

「これから話すわ。座ってなさい、今ご飯持ってくるから。」

鼻唄を私達に聞かせながら、台所に消えていった。残された私は静かにこみあげる疑念を男に向けた。

「どなたですか。」

同じ質問をぶつける。

「これから夕飯を交えて話しましょう。」

男は冷たい声で言った。私は眉根をひそめながらもそれに従うしかなかった。

「さ、食べましょう？」

夕飯は鍋。手間がかからず楽に出来ると、母がいつも言う得意料

理だ。

「勝さん、味はどうかしら？」

「美味しいよ。料理上手いんだね。」

少し褒められただけで頬を赤に染める母。それは私の知る母ではなく、一人の『女』だった。

「詩乃、食べないの？」

私は箸に手をつけていなかった。口を尖らせ、母を見つめる。

「この人誰？」

「食べ終わったら話すわ。早く食べないと冷めちゃうわよ？」

ヘラヘラした母の顔は嫌悪感を募らせた。

「誰なの？」

「……。」

私の追求に、母の表情が変わった。

「新しいお父さんよ。」

「……え？」

母の一言が信じられなかった。

「勝さん。私の三つ歳上なの。」

「何で……」

「好きだから。それ以外に何かあるの？」

「だって、お父さんが死んでまだ三年しか経ってないんだよ？」

当たり前のような台詞に、私は頭がおかしくなりそうだった。

「三年も待ったわ。もう充分。」

「いつから、再婚考えてたの？」

「二年前から。」

「……そう。」

私は黙り込んでいる男に目を向けた。

「お母さんのこと、ちゃんと好き？」

「……。」

「答えられないの？」

「詩乃やめなさい。」

「ねえ、どうなの？」

「詩乃！！」

母は私の頬を叩いた。

「……。」

「やっぱり子供はうるさいな。」

うんざりしたような声で男が呟いた。

「今日はこれで帰るよ。」

「ま、待つて勝さん！！」

母が呼び止めるために叫んだのは、ちょうど男が閉めた玄関の音にかき消されてしまった。

「……。」

「何なの、アンタ。」

「お母、さん……？」

「あたしの人生の邪魔しないでよ……！！」

母はヒステリックに叫びだした。テーブルに置かれた鍋や皿を引っくり返し、破片が床に散らばる。

「……っ。」

「アンタなんか……」

鬼のような形相で母が私を睨んだ。

「アンタなんかいなきやよかったのに！！」

時が止まった気がした。私は生まれてはいけない存在だったのか。

「詩乃。」

「何……？」

「お父さんの実家、行ったことあるわよね？」

唐突な質問に戸惑いながらも首を縦に振った。

「そこに行きなさい。」

「……どうということ……？」

呼吸が上手く出来ない。喉に何かがつかえたみたいだった。

「もう親子ごっこはおしまい。」

「何……何言ってるの？」

もうつんざりだというように母は床に座り込む。

「ねえ！！親子ごっこって何なの！？」

私は母の肩を揺らす。

「おかしいと思わなかった？」

「え……？」

「アンタの人生の途中からあたしが入ってきたのに。」

その言葉に、小さい頃からあった違和感が滝のように溢れてきた。

「お母さんは、私のお母さんじゃない……？」

母はフツと笑う。それは肯定をあらわしていた。

その後すぐ、私は父方の祖父母の家に引っ越した。母とは……もう会っていない。

9 話：輪廻

「……………」

目が覚めたら泣いていた。久々に昔の夢を見た。
汗と涙で気分が悪い。

「起きた？」

声のした方向に目を向ければ、首を傾けたアサミさんがいた。

「お、はようございます。」

「おう。何、怖い夢でも見たか？」

「あー……、そんなところです。」

過去の出来事とはいえ夢の話をするのは気が進まなかったので、
私は適当に相槌を打つことにした。

「具合どうだ？」

「大丈夫、だと思えます。」

「ふーん……あんま無理すんなよ。」

ポンポンと頭を撫でられた。それはとても心地よくて、嫌だった
気分が癒えていく。

それと同時に、心の中全てを見透かされている気もした。

「司馬は？」

「向こうでふて寝してる。」

見に行くと二人掛けのソファにおとなしく寝転がっていた。
規則正しい息遣いに、眠っている事実が裏付けられた。

「足がはみ出てる……………」

割と身長が高い司馬なので、ソファの長さで身長があっていない。
それはなかなか奇妙だった。

「何か飲むか？」

「うーん…… いらないます。」

食欲どころか飲む気すら起きなかった。

「あつそ。」

アサミさんは少しの間キッチンに消えた。戻ってきたときはミルクの入ったコーヒーを手に持っていた。

「今更飲みたーいとか言うなよ？」

「言いませんよ、子供じゃあるまいし……。」

「高校生だつて子供だろ。」

「子供ですけど、バイトだつて出来て一人暮らしも無事に出来るんだから大人みたいなもんでしょ。」

「…… 詩乃つて一人暮らし？」

「あ、はい。」

「へえー。だからコンビニでバイトか。」

「アサミさん。」

「？」

「店長を撃つたとき、だいぶ離れてたじゃないですか。」

「だから？」

「誰に銃教わったんですか？というか…… 誰に殺しを教わったんですか？」

誰が今のアサミさんを作り出したのか、何故か私は知りたくなつた。

「別に誰も。」

「…… 誰も？」

「そ。教わつたりしなかった。」

興味の薄い答え。

「だ、だって、何も知らずに銃なんか手に入るわけ……。」

私にはますますアサミさんの存在が謎めいて見えた。

「しいて言えば血と運命、だな。」

少し間を開けてアサミさんはコーヒーを飲む。

「俺の体に流れる血が教えてくれる。俺の存在自体が人殺しの俺を作った。」

「……運命っていうのは？」

「俺の親父も一度だけ人を殺した。自首して今は警察のオリにいるけど。」

「……。」

予想外の言葉に口を閉じるのも忘れていた。

「だから銃とかサバイバルナイフとかは家に転がってたわけ。親父気付いてつかね、一本盗んだの。」

乾いた笑いを浮かべ、アサミさんは言った。

「ひいた？」

顔を覗き込まれる。

「……少し。」

「正直でよろしい。」

頭を撫でられた。彼の笑顔はたまに優しくなる。ここ数日で私がわかったことだ。

「さて、そろそろ固まったかな。」

「……固まる？」

「見る？」

何のことかわからないまま私は頷いていた。

「此処だよ。」

「此処って……」

アサミさんに連れられてきたのは無数の腕が並ぶあの部屋。

「固まったってまさか……。」

「そのまさかだよ。」

鈍い音をたて、その部屋のドアが開いた。

「――！！」

私は驚き、息を飲んだ。目の前には心臓部分に穴の開いた死体が立っていたからだ。零下の冷たいこの部屋のせいで、直立のまま凍っている。

おそらく私が精神的に駄目だったときにここまで運んだのだろう。夕食の後に出かけたのはこのためだったのだ。

「これくらいなら良いな。」

アサミさんは何処からか布製の鞆を持ってきた。ガチャと音をたてて、重たそうにそれを床に置く。

私はその中身をそつと覗いた。

「……オノですか？」

鞆には小型のオノやナイフが詰め込まれていた。見たところ、なかなか使い込まれた物に感じる。

「当たり前、解体用の。」

そう言うのアサミさんはオノを死体に振り下ろした。

「驚いた？凍って血は出なくなってるの。」

私とアサミさんの足元にはオノの勢いで倒れた死体と、そこから切り放された腕が転がっていた。

「こうやって作ってたんですね……。」

死体を見る。胸に開いた穴以外は外傷が無いことに気付いた私は率直に尋ねた。

「心臓以外に撃つたりしなかったんですか？」

「じわじわ殺すなんて俺の趣味じゃないんでね。」

彼なりのプライドなのだろうか。普通の人にはあまり理解出来ないが、死ぬ側の人間からしたらアサミさんのポリシーは賛成だと思った。

そんなことを考えている間にアサミさんは丁寧に切り放した腕を持って列に並べようとしていた。

「アサミさん。」

「あ？」

「一個聞いて良いですか。」

「何だよ、くだらねえことなら願い下げだぜ？」

「人を殺すって、どんな気持ちですか。」

「……。」

さつきより少しだけ腕を乱暴に扱い、彼は私を睨んだ。

「聞いてどうすんだよ。」

「……別に何も。ただ、殺し続ける理由が終わる日は来るのかな、って。」

アサミさんの殺人は、延々繰り返されるのだろうか。

「来ねえさ。俺自身が死ぬまではな。」

「……。」

「前に言っただろ？俺はスイッチがあるって。」

確かに、アサミさんは自分の中にスイッチがあると言っていた。

それでも、彼の快樂殺人が止まることを願う私は、馬鹿なのだろうか。

自分で自分がわからなくなる。それが凄く私を不安にさせた。

「俺はまだ作業あるから残る。お前は戻ってテレビでも見てろ。」

「……はい。」

目を伏せ、逃げるように部屋を出た。

壊れた窓のせいで、すきま風が頬を撫でる。生暖かい温度のそれは一層私の気分を悪くした。

10話：価値観

「詩乃起きてたんだ。」

「……司馬。」

リビングにはまだ眠そうな司馬がいた。

「具合どう？」

「もう大丈夫。」

「そっか。」

特に話すことが浮かばなかった。アサミさんの言葉が頭から離れなかったからだ。

「テレビ見て良い？」

「あ、うん……。」

司馬の問いに私は頷いた。

カーテンを閉めきっているため、薄暗いリビング。そこにボンッ

……と音をたてて、テレビの明かりがついた。

「あー、まだ俺達探されてるな。」

ニュースには『コンビ二大量殺人事件、人質未だ行方不明』と書かれていた。

「……。」

「結構、俺ら有名人じゃない？」

「……そうだね。」

冷めた気持ちでそう返した。

テレビは次のニュースに変わる。

「へえー、政治家と暴力団のいざこざかあ。」

そんな事件はよくあること、などと思うようになった。

「司馬。」

「？」

「何で生きたいって思う人が死んで、死にたい人が生きてるの？」

「……さあ。」

唐突な質問に司馬は顔を曇らせた。

「神様って残酷。」

生きる価値のない人間を残し、未来のある人間を殺すなんて。

「……どうやって死にたい？」

「え？」

「死ぬなら。絞殺、撲殺、銃殺……方法はいろいろあるけど。」

「……別に何でもいい。ただ願うのは、」

私はそこで言葉を止めた。

「願うのは？」

「……アサミさんに殺してもらいたい。」

「ふーん……もしかして好き？」

「誰が？」

「詩乃がアサミさんを。」

「は？」

「あ、違う？」

「ごめんごめん、と呟いて司馬は目を伏せた。

「……わかんない。」

「わかんないの？」

「他人を好きになったことないから。」

「そっか。」

「……変？」

普通なら初恋だっけしてるはずだし、それなりの恋愛経験だっけあるはずだ。

「いや？俺も恋なんかしたことないから。」

「そっか……。」

その眩きとともに息を吐きだす。

「おー、司馬起きたか。」

アサミさんがタオルを頭にかぶせて現れた。上気した頬と濡れた髪で風呂上がりということがわかる。

「おはようございます。アサミさんは恋愛経験あるんスか？」

「何、いきなり。」

「ただの興味ツスよ。」

「あるに決まってるんだろ。」

「へえー……」

司馬が意外そうな声をあげた。

「って言いてえとこだけど無い。」

「何だ、アサミさんも無いんスね。」

つまらなさそうにソファに顔を埋める司馬。

「だって片っ端から殺しそうになんだもん。」

「好きな人を？」

「そう。」

私は何も言えなかった。司馬も横で啞然としている。

「結構昔から殺人欲はあったんだよね……。」

ポツリと眩く言葉はなかなか重く感じた。

「そんな欲持ってて得したんスか？」

「さあ……どうかね。」

アサミさんは曖昧に返すだけだった。

「暇……。」

司馬とアサミさんは二人仲良く部屋にこもっている。特にやるこ

とのない私は近くにあった雑誌をめくって暇潰しをしていた。

「恋、ねえ……。」

今まで友達から聞くくらいだったものが、自分の中に存在しようとしている。私の中の不変をぶち壊そうとしている。それは少し怖いものだった。

「……。」

自分の気持ちなんてわからない。ただ、心から欲するのはアサミさんに殺されること。

それを私は『恋』と呼ぶことにした。

「アサミさんが好きな人を殺したくなるように、私も好きな人に殺されたい。」

愛する人にそんなことを求めるのは完全に間違っている。でももう関係ない。私はおかしくなったかもしれないから。

私はゆっくりソファに体を沈めて、眠ることにした。

11話：転がり落ち続ける石達

「もっと相手見てー。」

「さすがに毎回同じヤツじゃやる気なくしますよ……。」

長身男二人の前には、蜂の巣のように穴の開いた人間型の板があった。

「なんだよ、心臓狙うだけなら関係ねえだろ？」

「いや、心臓部分はもう穴開いちゃってるじゃないツスカ。」

「どんだけ撃ったんスカ、と呆れ気味に尋ねる。」

「三年前から使ってたからなー。さすがに替え時だな。」

「……アサミさん。」

銃の照準をあわせながら司馬が口を開いた。

「あ？」

「詩乃、ホントに殺すんスカ？」

「それを願ってるのは本人だろ？俺は役目を果たすだけだよ。」

司馬の方を見ることなく彼は答えた。

「そうツスカ……。」

「何？情でもわいた？」

「……少し。」

互いに顔を見ることはない。二人の声と銃声だけが静寂をやぶっていた。

「それ、殺人犯にはいらねえよ？」

「まだ俺誰も殺してないツスよ。」

「なるんだろ？人殺しに。」

「……なるよ。」

司馬は銃を持っていた手を下ろす。

「じゃあさつさと練習しろよ。」

「ちよつと休憩しません？」

「……しょうがねえな。」

二人は並んで座り、ペットボトルに入れた水を口に含む。

「いつまでこんな生活続けるんすか？」

独り言のように司馬が呟く。

「司馬も詩乃みたいなこと聞くのな。続くまでだよ。」

「殺したくなかったことはあるんすか？」

「ねえな。」

「はあ……」

驚きとも感嘆ともとれる司馬の声。

「ていうかさ、お前の親、心配とかしてねえの？」

「心配は……してるんじゃないスかね。」

「ずいぶん他人事だな。」

「そりゃあ、他人みたいなもんツスから。」

諦めたような笑みを見せる司馬。

「ふーん。」

「俺の家族、皆法律関係の仕事なんすよ。だから勉強とかもつるさくて。」

「良いわけ？法律家族が殺人犯になるとか。」

「自分のことは自分で決めたいツスから。」

「……。」

満足げな司馬の姿を彼は黙って見つめるだけだった。

「やっぱ新しい人型板買いませんか？」

「そのうちなー。」

リビングに戻ると詩乃が眠っていた。

「詩乃ってよく寝るなあ。」

アサミはぶにぶにと詩乃の頬をつつく。

「暇なんでテレビつけるッスよー。」

司馬は眠そうな声で言った。そして相手の了解を聞かずにテレビがつく。

「……アサミさん。」

「あ？」

詩乃の頬をつつくのをやめ、アサミが司馬の方を見る。

「これ、ヤバくないッスか……？」

彼の指差した先には、防犯カメラの映像であろうアサミの姿が画面に映っていた。

12話：坂の終わり

「うわー、やべえな。」

「どうするんスカ？」

私が目を覚ましたら、真剣に話をしている司馬とアサミさんの姿があった。

「……どうかしました？」

「アサミさんがコンビニの防犯カメラに映ってたんだ。」

「……。」

司馬の言葉に私の思考回路は一瞬止まり、唸るような音をたてて動き始めた。

「それって、此処がバレるかもしれないってこと？」

「それだけじゃない、アサミさんが捕まる可能性だってある。」

「どうするんですか？」

カメラに映った当人を見れば、私や司馬よりも落ち着いているように見えた。

「しばらく一人で考えて良い？」

それがアサミさんなりの今の答え。断る理由もないので私と司馬はおとなしく了承した。

「悪いな。」

そう言い残してアサミさんはリビングから去っていった。

「どうなるのかな、私達。」

「さあ……。」

ただ時間が過ぎていく。私達は同じような台詞ばかり繰り返していた。

「詩乃。」

「？」

「今でも死にたい？」

「……少し。」

私はこの短い期間の中で微妙に揺れていた。生か死か、時が流れることに悩むばかりとなっていた。

「良いわけ？ そんな気持ちで死んでも。」

「……いずれ死ぬんだから、特に問題なし。」

「ふーん。」

嘘、ただの強がりだ。

「司馬は？ 殺人願望まだある？」

「……勿論。」

「決めた。」

その言葉と共に、アサミさんは現れた。

「……。」

「どうするんですか。」

「此処出る。長年住んでたから愛着あるんだけどな。」

感慨深そうにアサミさんは壁を掌で撫でた。

「喜べよ、お前ら。」

「？」

「何スか？」

「三日後、それぞれの望みを叶えてやる。」

それを聞いた瞬間、横で息を飲む音がした。勿論アサミさんではなく司馬だ。

「……本気ッスか？」

「俺がいつ冗談言ったよ？本気だ。」

三日後——私の命の終わりは決まった。

「詩乃。」

「……。」

「詩乃？」

「あ、すいませ……何ですか。」

それなりに動揺した私はアサミさんの声に反応するのが遅れてしまった。

「何がしたい？」

「え？」

「お前の終わりは三日後。それまで、どうしたい？」

「……。」

思考が上手く動いてくれない。

「自分の部屋に引き込もってもいいし、俺らの顔見たくないなら三日間外に出るけど。」

アサミさんが丁寧過ぎる説明をくれた。少し悩んだ結果——

「私は……いつも通り、過ごしたいです。」

最期までこのままでいたいと思った。

「了解。」

アサミさんは私の頭をポンと撫でてくれた。それだけで私の気持ちには穏やかになっていた。

13話：芸術の中で

私は自分の部屋にいた。

「あと三日、か……。」

死刑宣告をされた。願っていたことなのに実感がわかない。

「……。」

彼は私をどう始末してくれるのだろうか。そんなことが頭に浮かんでくる。

「……あ。」

一つだけ浮かんだ私だけの死に方。

部屋を飛び出して私はアサミさんの元へ向かった。

「アサミさん？」

ドアの前から呼び掛けてみる。

「詩乃か、何？」

「入って良いですか？」

「……どうぞ。」

一度深呼吸をしてドアを開けた。冷気の立ち込めたその部屋に彼はただ立っていた。

「何かあった？」

「お願いが、あるんです。」

「ふーん？」

私の願いにさして興味があるようには見えず、凍った真つ白な腕を眺めていた。

「此処で、殺してください。」

「……何？」

理解出来なかったのだろう。眉間にシワを寄せて聞き返された。

「此処にある腕は、持っていけないでしょう？」

「まあそうだけど……」

「なら、此処で死なせてください。」

最期くらい仲間に囲まれて死にたい。アサミさんの手掛けた芸術の中で。

「……わかった。」

考えるそぶりを見せた後、アサミさんは承諾してくれた。

「ありがとうございます。」

「詩乃。」

部屋を出ようとした瞬間、アサミさんが呼んだ。

「何ですか？」

「お前の死処は此処で良いんだな？」

「……死処^{シシヨ}？」

聞き覚えのない単語に私は首を傾げた。

「死に場所のことだよ。」

「へえー、そうなんですか。」

「で？後悔しねえか？」

「……しませんよ。」

強引に笑って見せた。司馬も目の前の彼も、私の決心を揺らがせる材料だ。

「ならちゃんと殺してやるよ。」

「……ありがとうございます。」

確実に私の死ぬ日は近づいていた。

13話：芸術の中で（後書き）

毎週月曜日の更新でしたが一日遅れてしまい、申し訳ありませんでした。

もう少しで完結します。それまで読んでみてください。

ここまで読んでくださりありがとうございました！！

14話：裏切り

今日は私が命を終える日。

「ビビってねえか？詩乃。」

「まさか。」

アサミさんから与えられた三日の猶予。私はずっと『生』について考えていた。

「司馬はどこにいるんですか？」

「色々と用意があんだよ。色々、な。」

「ふーん……。」

人はいずれ朽ち果てる。ただそれが早いか遅いかだけだ。年老いてシワだらけで死にたくない。だから私は此处で死を受け入れることにした。最高の死に場所だと思えたから。

「このドアの向こうに、お前の望んだセカイがある。」

「……わかってます。」

私は唾を飲み込んだ。ドアにそつと手を触れる。

「良いな？」

「はい。」

ドアを開く。そこは相変わらず寒く、無数の腕が飾られていた。違っていたのはただ一つ。

「司馬……？」

「……っ。」

震える手で拳銃を握る司馬がいたことだ。

「何………どうしたの？」

言葉の一つ一つに吐く息が白い。

「最後の仕上げだ。殺人犯としてのな。」

「……仕上げ？」

「アサミさん、やっぱり無理ッスよ……!!」

「これがお前の願いじゃなかったか？」

冷徹な声でアサミさんは司馬に言った。

「詩乃を殺すなんて出来ませんよ!!」

「……え？」

聞き間違いかと思った。否、聞き間違いであってほしかった。

「私を殺すのは、アサミさんじゃなかったんですか……？」

私の問いにアサミさんがせせら笑う。

「俺がいつお前を殺すって言った？誰も俺自身の手でお前を殺すなんて言ってないだろ？」

「……。」

確かにその通りだ。アサミさんは一度も私を殺すなんていつてない。

でも私はどこかで信じていた。彼が私を殺すと。

「……っ。」

私は裏切られた。悔しさに顔が歪む。

「お前ら二人の希望を同時に叶えてやるんだ。悪い話じゃねえだろ？」

「悪すぎッスよ……。」

司馬はうなだれている。私はアサミさんをじつと見つめていた。

「死にたい人間を殺すのは、趣味じゃないってやつですか？」

「いや？ただ単に思ったただけだ。面白そうって。」

そうだ、この人はこういう人だ。自分の気持ちにけして逆らわない。

「司馬、今更何ビビってんだよ。」

ツカツカと足音をたて、アサミさんは苛立たしげに司馬に近付く。
「ちゃんと教えただろ？一瞬で死なせるには心臓のど真ん中に当てるって。」

司馬の腕を動かし、私の心臓付近に銃の照準を当てた。

「や、やっぱ俺には無理ッス!!」

司馬は拳銃を下ろそうとするが、アサミさんがそれを許さない。

「アサミさん……!!」

「早く殺れよ。」

射るような目付きで司馬に凄む。

「俺には出来な……」

「司馬。もついいよ。」

「詩乃……?」

私は薄く笑みを浮かべた。ただ唇の端は少しひきつっている。

「殺してよ。私を。」

15話：ゲームオーバー

「何……言っただよ詩乃。」

「いい、殺つて。」

「詩乃!!」

司馬の声が頭にガンガン響く。私は投げやりになっていた。

「ほら、撃てよ。」

アサミさんは精神的に司馬をどんどん追い詰める。

「うう……ああっ!!」

司馬は叫び声をあげて銃弾を放つ。それは私の左肩をかすった。

「……っ。」

痛みより鋭い熱さのような感覚が私を襲う。膝から崩れ落ちた姿を見た司馬は拳銃を落とした。

「詩乃っ!!」

司馬が駆け寄ってくるが傷に触れることはない。

「痛い……。」

目頭が熱くなる。痛みもあるし、生きていて良かったと思ったのだ。

銃声がした瞬間、死ぬと感じた私はどうしようもなく震えていた。死にたいと願ったはずなのに……どうしてこんなに震えるんだろ
うか。

「生きたいんだろ?」

「……アサミ、さん?」

私の気持ちを知ってか知らずか、彼は唐突に切り出した。

「存在否定されて死ぬことなんてねえよ。むしろ笑い飛ばすくらいになれ。」

「……。」

「生きたいだろ？」

「ただらだら流れる血液を気にすることなく私は頷く。」

「なら生きりゃいい。」

「当たり前のようにアサミさんは言った。」

「お前は此処で一回死んだ。それでいいだろ？」

「いつものアサミさんに戻った。裏切られたときの憤りはもうない。」

「司馬あ。」

「はいっ!？」

「人殺しは嫌だろ？」

「辛さを堪えて司馬は頷いた。」

「お前にや向いてねえから、他の職探せ。」

「……はい。」

「私同様、司馬もアサミさんに対する気持ちが無に帰ったらしい。」

「それはその瞬間だった。」

「日向浅海!!」
ヒュウガアサミ

「黒っぽいスーツの二人組と警察官らしき人々がドアをぶち破って入ってきた。」

「……コンニチハ。」

「薄く笑うアサミさん。その表情は初めて会ったときと同じだった。」

「何がこんなにちはだ……。」

「ようやく見つけたぞ殺人鬼!!」

「スーツの男達が口々に言う。おそらく刑事か何かなのだろう。」

「殺人鬼なんて言わないで!!」

「私の口は勝手にそう告げていた。それを聞いて此方に目を向ける」

警察。

「あれは……?」

「多分事件で誘拐された高校生ですよ。可哀想に……」

可哀想なんかじゃない。アサミさんは私と司馬に居場所をくれた。そう言いたかったのに、肩の痛みで叫ぶことが出来ない。

「じつとしてるよ……」

不安げな司馬の声が耳に入る。

「じつとしてなんかられないわよ……っ。」

悪態についても体に力が入らない。目が霞みそうで、必死に頭を振る。

「高校生の一人は肩に怪我をしています!!」

「何!？」

「奴は拳銃を持ってる、きつと浅海が撃ったんだ。」

「違う!! あれは俺が……」

警察の言葉を訂正しようと司馬が口を開く。

「司馬あ!!」

しかしアサミさんがそれを大声で止めた。突然の声に驚いた司馬は言葉をつぐむ。

「アサミさ……何で……。」

「罪を、かぶるうとしてるの……?」

私のか細い声はアサミさんに届いたらしい。こちらに目を向けた。

「残念……ゲームオーバーだ。」

泣くような笑みを見せ、銃口をアサミさんのこめかみに当てる。

「アサミさ……!!」

私や司馬の制止より先に、一発の銃声が轟いた。

16話：エピソード

「詩乃、どこ行くの……？」

ガヤガヤと騒がしい学校の教室。立ち上がった私に友人が尋ねる。

「屋上。」

「あ、あたしも一緒に……！！」

「しないよ。飛び降りなんか。」

慌てぶりで意図がよく見える。私は冷たく言い放った。

「……。」

同情の視線を振り切り、私は屋上に向かった。

「あー、面倒くさい。」

この口癖も久々だ。思えば、アサミさんと会ってから一度も言っていない気がする。

いつものように合鍵で屋上に入る。

「……。」

アサミさんは私と司馬の前で死んだ。飾られていたたくさんの腕の上に倒れ込み、動くことはなかった。流れる血は止まることなく床を濡らし、鉄の臭いが部屋中に立ち込め、並ぶ腕達は全て折れ曲がっていた。

それから後は、あまり記憶がない。警察に介抱され、友人に泣かれても、私の心は上の空だった。

「はぁ……。」

息を一つ吐き出し、フェンスを乗り越え、建物ギリギリの場所に立つ。

司馬とは、一度も会っていない。会わない約束をした。会えば必ずあの人を思い出してしまうから。

警察の話では、アサミさんは精神的に病んでいたらしい。だからこんなことをしたのだと言う。……それがどうしたというのだ。

ほんの数週間過ごした間でも、私には彼がまともに見えた。彼を尊敬していたし、今も一番慕うのは彼だ。一緒に生活して、彼は確実に私や司馬の心をつかんだ。ただ、それを言っても誰も信じてくれなかった。

どうして人は、自分が正しいと思ってしまうのか。
これから私は、世間の人間に戦いを挑む。

「負ける気がしないよ、アサミさん。」
アサミさんの真実を広めるために、私はもう少し生きることにした。

死処は、まだ遠い――

16話：エピソード（後書き）

いかがでしたか？暗い話でしたが何か心に残る作品だと思っていた
だけると嬉しいです。

長々と読んでくださり、本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7170b/>

死処

2010年10月8日14時19分発行